

平野謙全集

㊦ 新潮社版

印刷／昭和五十年三月二十日
発行／昭和五十年三月二十五日

平野謙全集 第七卷

著者／平野謙

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社 郵便番号一六二 東京都新宿区

矢来町七一 電話東京二六六・五一一一（業務）

二六六・五四一一（編集） 振替東京四・八〇八

印刷所／塚田印刷株式会社

製本所／神田加藤製本株式会社

定価／三〇〇〇円



乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

平野謙全集／第七卷 ■ 目次

作家論 I

夏目漱石	8
国木田独歩	30
田山花袋	38
徳田秋声	56
島崎藤村	94
岩野泡鳴	128
近松秋江	150
正宗白鳥	179
永井荷風	195
志賀直哉	202
野上弥生子	214
石川啄木	233
谷崎潤一郎	243

宮嶋資夫	257
葛西善藏	260
里見 稔	274
菊池 寛	280
室生犀星	298
豊島与志雄	300
宇野浩二	307
広津和郎	324
芥川龍之介	390
佐藤春夫	392
小島政二郎	401
葉山嘉樹	409
滝井孝作	411
牧野信一	414

十一谷義三郎		431
嘉村礒多		434
横光利一		439
竹内 仁		454
橋本英吉		456
黒島伝治		459
徳永 直		461
宮本百合子		471

平野謙全集

第七卷

作家論 I

夏目漱石

I

明治四十一年一月に高浜虚子の小説集『鶏頭』が春陽堂から刊行された。今日虚子はホトトギス派の巨匠としてその名を一般に知られているが、明治四十年前後には盛んに小説も書いていたのである。その小説集『鶏頭』に夏目漱石が長文の序文を書いている。普通の序文というより、一個の小説論とよんだ方がふさわしい。この序文は文学史的にも有名なもので、漱石の反自然主義的な小説論としてよく知られているが、話の順序として、ここではまずその序文の紹介から書いてゆきたい。

異例な『鶏頭』序文において、漱石はまず小説を「余裕

のある小説」と「余裕のない小説」との二種類にわけてみることを提唱している。漱石はそういう小説の分類法が唯一のものであるとも最高のものであるともいっているわけではない。ただそういうわけかたをしてみると、現在おこなわれている小説の性格について、新しい側面が明らかになる、といっているのである。便宜上、漱石のいう「余裕のない小説」の説明からとりかかれば、「一言にして云うとセツパ詰った小説」のことであり、「一毫も道草を食った」り寄道をして油を売ってはならぬ小説」のことであり、「たとえばイブセンの脚本を小説に直した様なもの」のことである。「人は之を称して第一義の道念に触れるとも、人生の根元に徹するとも評して居る」が、要するに人生観上の「死活問題」をあらわした小説のことである。今日ふうにいいなおしてみれば、極限状況における人間実存の問題を扱うといった深刻な小説のことを、漱石は「余裕のない小説」とよんだのである。漱石は「余裕のない小説」の意義を認めなかったのではない。大いにその意味を認めている、といってもいい。しかし、世の中はひろく、人さまざまであつてみれば、小説が「余裕のない小説」一点ばかりでなければならぬ道理はない。そういう深刻で窮屈な小説とは反対の「余裕のある小説」の存在理由を認めてもいいではないか、というのがそのときの漱石のいい分である。

「余裕のある小説」の説明として、漱石は「低徊趣味」という言葉を用いている。つまり、「左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いという風な趣味」のことであり、「出来るだけ長く一つ所に佇立する趣味」のことであり、「買物に出ると途中で引っかかる」趣味のことであり、「肝腎の買物は中々弁じない」趣味のことである。こういう低徊趣味は暇と余裕がなくてはできないもので、いつも死ぬか活きるかのセツパつまつた気持の人にはほとんど無縁の趣味である。しかし、そういう低徊趣味を好む人が現に存在している以上、その低徊趣味を活かした小説の存在もまた許さるべきではないか、というのが漱石のいい分である。

漱石がこの有名な序文を書いたのは、明治四十年十一月のことだった。このとき漱石は最初の新聞小説『虞美人草』を書きあげ、つぎの『坑夫』にとりかかろうとしていた。文壇全体からいえば、明治四十年九月に田山花袋の『蒲団』が発表され、ようやく自然主義文学がその絶頂へのぼりつめようとする時期にあたっていた。断わるまでもなく、漱石は人生の真諦にふれるとかふれぬとか、セツパつまるとかつまらぬとかを評價の基準にしようとした自然主義文学の反措定という含みをもって、この序文を書いた。しかし、この漱石の小説論はそういう歴史的な一時期にだ

け妥当するものではなく、たとえば第一次戦後派と第三の新人たちとの関係にもそのままではまるだけの普遍性をもっている、と思う。

しかし、いま私が最初に漱石の小説論を紹介したのは、それがどれほどの普遍妥当性をもっているか、という問題のためではない。この小説論と漱石自身の小説との関係を明らかにするために、まず紹介したかったのである。一口にいうと、漱石の作品は「余裕のある小説」から「余裕のない小説」へと、次第に移り変っている。たとえば『坊っちゃん』と『こころ』とを同一平面上にならべたら、これが同一作者の手になるものとはとても思えぬくらいである。前者はセツパつまらぬ小説の一代表であり、後者はセツパつまつた小説の一典型である。漱石自身の小説論がどうあるうと、漱石は「余裕のある小説」から「余裕のない小説」へと、漸次変貌し、発展していったのである。『こころ』の主人公「先生」は、どうみてもイブセンの戯曲の主人公がそのまま生れかわったとしか思えぬほどである。そういう移り変りをあらわす中間項に、『三四郎』と『それから』がある、といえないこともない。

冒頭に紹介した小説論が『虞美人草』完成直後のものであることは、すでに書いた。『虞美人草』や『草枕』が「余裕のある小説」の最たるものであることも、こりにこ

ったその文体からみて明らかだろう。そういう『草枕』などからみれば、『坊っちゃん』は必ずしも「余裕のある小説」とはいえないかもしれない。その文体も歯切れのいい平明なものである。しかし、たとえば「うつくしい人が不人情で、冬瓜の水膨れのような古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない」という文章にしても、普通「物事はあてにならない」とでも書くべきところを「油断が出来ない」と書かれてみると、そこに一種のおかしみが生ずる。それをいわば隙だらけ、油断だらけといってもいい。吾気坊主の主人公が「油断が出来ない」などと考えるのだから、いっそうおかしくなる。おかしみは一種の余裕である。そういう実例は『坊っちゃん』のいたるところにある。いや、そんな些細なことより——『坊っちゃん』は明治三十九年四月号の『ホトトギス』に発表されているから、現代小説としては明治三十八・九年ころの物語のはずである。もうすこし詳しくいえば、明治三十八年九月ころ、坊っちゃんは中学教師として松山に赴任したとみられる。有名な日本海海戦がたたかわれたのは明治三十八年五月のことであり、日露戦争の媾和全権委員に小村寿太郎が任命されたのは同年七月のことであり、いわゆるポーツマス条約が調印されたのは同年九月のことである。日比谷の焼打ち事件に代表されているように、明治三十八年九月ころは日露戦争

争という国家的大事件の終結をめぐって、国中がひっくりかえるような時点だったはずである。しかし、『坊っちゃん』にはどのような意味でも日露戦争の影響など影さえずおとしている。いや、全然おとしているわけではない。山嵐と一緒に、主人公は「祝勝会」の式に参列し、その夜「祝勝会の余興」の剣舞(?)を見物している。しかし、日露戦争の「祝勝会」の意味そのものについては、主人公は一顧だにしていない。つまり、『坊っちゃん』は一応は日露戦争直後の時点に設定されているとみられるにもかかわらず、登場人物のどの一人でも、日露戦争のもたらした人民の犠牲などについて思案するものがあつたら、それだけで場ちがいになるように物語全体が仕組まれているのである。この一事をもつてしても、『坊っちゃん』が「余裕のある小説」に属することは明瞭である（私は「戦勝会」の意味を、一応日露戦争のそれとしたが、実はそれより十年前の日清戦争のそれであつたかもしれない。漱石は明治二十八年に松山中学に赴任しているから、そのとき実際に日清戦争の「戦勝会」を見聞したという方が実情に即しているかもしれない。これを逆にいえば、「戦勝会」そのものが日清の役のそれか、日露の役のそれかさえも分明でないのである）。これをもうすこし別の視点からいえば——『坊っちゃん』の発表と時をおなじうして、島崎藤村の処女長

篇『破戒』が刊行されたが、おなじ学校教師を主人公にしているにもかかわらず、その作柄をくらべてみれば、二作の逕庭はまさしく「余裕のある小説」と「余裕のない小説」とのそれにほかならない。よく知られているように、『破戒』は日露戦争に従軍したのおなじ覚悟をもって書かれた「セツパ詰った」小説の典型である。

日露戦争のさなかからその直後にかけて書きつがれた長篇『吾輩は猫である』を処女作として、『坊っちゃん』や『草枕』をたてつづけに発表したことが、疑いもなく夏目漱石をして夏目漱石たらしめたのである。私は今度ひさしぶりに『草枕』も読みなおしてみたが、あのこった文体によって漱石の狙った低徊趣味的な美が、すくなくとも今日の好尚からはすでにほど遠くなっていることを認めざるを得なかった。しかし、『坊っちゃん』はその文体だけからみても、いささかも古びていない。これは驚くべきことである。『吾輩は猫である』とならんで、『坊っちゃん』が漱石の初期の代表作たる所以だろう。

『坊っちゃん』の魅力を一言でいいあらわせば、主人公の決断力の爽快にある、といっている。開巻第一ページに、小学校時分に二階の校舎から飛びおりて一週間ほど腰をぬかした挿話が語られてある。父親に叱られると、このつぎは腰をぬかさず飛んでみせますと答える。同級生にからか

われると、一瞬にして二階から飛んでみせる、という決断にまで踏みきり、そのことをあとから後悔していないのだ。最後は野だいこに玉子をぶつけるところに終っている。栄養補給のために買ってきた玉子八個を、思いきりよく相手の顔にたたきつけて、凱歌を奏するのである。その間、折角買った玉子代を損したなどということは、まるで主人公の頭には思いうかばない。そういう主人公の性格と行動を、作者は冒頭に「親譲りの無鉄砲」と説明している。もう一度島崎藤村と比較すれば、藤村は『新生』のなかで「親譲りの憂鬱」という言葉をおもおもしげにつかつて、父祖の顔廃した血統をにおわせているが、そういう『新生』の主人公と『坊っちゃん』の主人公とは、おなじ親ゆずりといっても、その行動様式においてなんと相異していることだろう。私どもはそれぞれの人生行路において、ひとつの行動にまで決断しなければならぬ岐路にしばしば面接せしめられる。しかし、その二者択一が重大であればあるほど、ひとつの行動にまで決断することの至難事を痛感せずにはいられない。決断したあとも、その結果を思いわずらい、後悔することがすくなくない。そういう私どもからみれば、『無鉄砲』にまで決断力に富む『坊っちゃん』の行動様式は、それだけで爽快である。それだけで魅力ある物語のヒーローとなる資格をそなえている。その決断力が正義感に

裏づけられているか、いないかは実は二の次といっている。

いわば無目的に決断力に富むことが、私どもの日常性の一対極として爽快なのだ。事実、『坊っちゃん』の主人公の決断力は、つねに慎重熟慮を欠いているともいえよう。

二階から飛びおろすことにはじまって、玉子をぶつつけることに終るまで、その行動様式は実利実害をぬぎにしたものだ。私どもの日常的の行動は、いつも実利実害につきまといわれている。それだけに実利実害をぬぎにしたこの主人公は、必ずしも敬すべきではないにしても、愛すべき存在たるを失わないのである。この点が実は『坊っちゃん』の急所なのであって、敬すべきではないにしても、愛すべき存在たるを失わない主人公のやや無鉄砲な決断力こそ、私どもの日常的な不決断ぶりを反省させる前に、思わずさわやかな笑いを誘うこととなるのである。私どもの不如意な日常性を忘却させるにたるユーモア文学の一古典たる所以がそこにある。その意味で『坊っちゃん』は今日でも「余裕のある小説」の一代代表作なのである。

『三四郎』もまたちがった意味で「余裕のある小説」の一実作たるを失わないと思う。それは篇中に登場する広田先生の悠容せまらざるすがたのためのみではない。広田先生は申すにおよばず、野々宮さんも原口さんも、美禰子もし子も、三四郎も与次郎も、すべてセツパつまってはいな

いのである。いちばんセカセカと忙しげな与次郎にしてからが、衣食の道にとびまわっているわけではない。一口にいて、今日の暮しむきに困っているような人物はここにはひとりも登場していない。みな閑人めいた風貌の男女ばかりである。ここでも土壇場に迫いやられて、死ぬか生きるかの問題や事件に直面するような人物は影さえみえぬ、といってもよからう。現に、三四郎がはじめて上京する途中に、名古屋で一泊したとき、もしかしたら三四郎はゆきずりの女と土壇場におちこむような関係となったかもしれないが、作者はそれをさりげなく回避させている。

三四郎の郷里にただひとり棲む母親は、ときどきのたよりの端に、近辺の村びとの噂などを書きこんでいるが、そこにわずかに書きこまれた下積みの人々の労苦にささえられて、そうとも意識せずに、三四郎は東京で学問や恋愛などについて思案できる身の上なのである。与次郎が三四郎に三十円の借金を申しこむが、その与次郎も馬券ですったから、やむなく借金をするまでである。その借金が間接の原因となって、三四郎は野々宮さんからお説教を食うような立場となる。そのとき野々宮さんはいったものだ、「なに、心配する事はありませんよ。なんでもない事なんだから。ただ御母さんは、田舎の相場で、金の価値を付けるから、三十円が大変重くなるんだね。何でも三十円あると、

四人の家族が半年食って行けると書いてあったが、そんなものかな、君」と。それを聞いていたよし子は「大きな声を出して笑った」のである。無論、大声で笑うよし子に悪意などあらうはずはない。ただ彼女は三十円あれば四人家族が半年食ってゆけるというような人々とは、まるで無縁の世界に棲む人であるにすぎない。そういう下積み生活とは全く無縁な人々の世界へ新しく組み入れられる三四郎その人の過程が、いわば『三四郎』のテーマなのである。

「余裕のある小説」たる所以だろう。

『三四郎』は明治四十一年九月から十二月まで『朝日新聞』に連載されたが、明らかにこの長篇は日露戦争後の物語である。上京途上の汽車のなかで、三四郎は広田先生とはじめて口をきくが、そのとき広田先生はこんなことをいう、「お互いは憐れだなあ、こんな顔をして、こんなに弱っているでは、いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですね」と。若い三四郎が「然し是からは日本も段々発展するでしょう」と反撥すると、言下に「いや亡びるね」と広田先生は断定したものである。つづけて広田先生はこんなこともいう、「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……頭の中のほうが広いでしょう。囚われちゃ駄目だ。いくら日本の為を思ったって最良の引倒しになる許だ」と。私は『三四郎』のなかに下積みの人々の生活

が正當に扱われていない、と非難するつもりはない。ただ日露戦争が終って、これで日本も世界の一等国の仲間入りができたと思ふ一般の風潮のなかに、このままでは日本は「亡びる」といい、「日本より頭の中の方が広い」といい、「囚われちゃ駄目だ」といいはなつような人を軸として廻転する新しい知的世界のなかに、われらの主人公が組み入れられてゆく過程において、学問や恋愛にも逢着するのが『三四郎』の世界だ、といたいだけである。だから、その恋愛も性欲を中心とする自然主義文学などのそれとは、まるで趣きを異にしているのも当然だろう。のちに三四郎池とよばれるようになった東大構内の池のほとりで、三四郎がはじめてみたとき的美禰子の幽艶なポーズが、よかれあしかれ『三四郎』の世界を象徴している。日露戦争後の新しいインテリゲンツィアの群像を、作者は一見「もう四十だろう。これより先もう発展しそうにもない」と最初に三四郎に思わせた広田先生を基底にすえて、かなり悠々と描きわけていたのである。しかし、今度『三四郎』を読みなおして少々意外だったのは、女主人公の美禰子が一度よし子と見合したところのある男と結婚することである。これは誇りたかいわれらの女主人公には、いささかふさわぬ結末である。おそらくここにヴェールをはいだ女主人公の案外功利的な実質を、作者は読者にさししめしたのかもしれない。

ない。「余裕のある小説」とはいつでも、その程度の辛辣無双な作者の眼は、つねに作品の基底に光っているのである。

それにしても、私の信ずるところによれば、『三四郎』は作者の「余裕のある小説」の最後の作にほかならない。

次作の『それから』以後、漱石はひたすら「余裕のない小説」の道をすすむこととなる。『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『こころ』と、「余裕のない小説」の道を歩一歩と深めてゆくのである。漱石が一作ごとに生々發展してやまなかった作家だったことは、すでに定評がある。そういう漱石であってみれば、「余裕のある小説」から「余裕のない小説」への百八十度の転向も、それとしてうなずけないことはない。しかし、『三四郎』と『それから』のあいだには、小説構成上の一種の断絶がある、というのがかねてからの私の意見である。その意味で私は『三四郎』『それから』『門』を三部作として一括する小宮豊隆の意見にむかしから承服しがたいのである。小宮豊隆は『三四郎』執筆前後に、ブーデルマンの一作目を批評したアンコンシアス・ヒボクリットという漱石の言葉にひっきりかきりすぎたのではないか。

なぜ漱石は年来の主張である「余裕のある小説」から「余裕のない小説」へと転向したのか。無論、それに対する十分な解答の用意が私にあるわけではない。ただ私とし

てはそこに職業作家としての漱石の自覚の深まりをみたいと思う。

明治四十四年八月に漱石は『道楽と職業』という講演を明石でしている。当時岡山に住んでいた学生の内田百閒が、わざわざ明石まで出向いて、胸とどろかせながら聞いた講演である。その講演のなかで、漱石はこんなことを語っている、「私の見る所によると職業の分化錯綜から我々の受ける影響は種々ありましようが、其内に見逃す事の出来ない一種妙な者があります。というのは外でもないが開化の潮流が進めば進む程、又職業の性質が分れれば分れるほど、我々は片輪な人間になって仕舞うという妙な現象が起るのがあります」「大きく云えば現代の文明は完全な人間を日に／＼片輪者に打ち崩しつゝ進むのだと評しても差支ないのであります」「あなた方は博士と云うと諸事万端人間一切天地宇宙の事を皆知っているように思うかも知れないが全く其反対で、実は不具の不具の最も不具な発達を遂げたものが博士になるのです」などと。今日ふうにいえば、人間の自己疎外ということ、すでに漱石は明治四十四年のむかしに力説したのである。人間が専門的な職業に組み入れられるほど、全人的な人間性は歪曲されざるを得ないという漱石の鋭い指摘は、東京帝国大学の教師という社会的に信用もあり、安定もしていた職業をわれから放棄して、